

2020（令和2）年度
一般社団法人 日本家政学会関西支部
第42回（通算第98回）研究発表会

研究発表要旨集

2020年11月18日（水）～11月24日（火）

誌上開催（担当：滋賀大学）

2020（令和2）年度
一般社団法人 日本家政学会関西支部
第42回（通算第98回）研究発表会

◆研究発表会開催の方法は誌上開催です。

研究発表要旨（300字程度）の公開および研究発表原稿（45字×60行以上70行以内）の提出、研究発表登録者および学会参加登録者による質疑応答を以て誌上開催といたします。

◆研究発表要旨は支部ホームページ上で公開します。

◆研究発表原稿は研究発表登録者および学会参加登録者のみ支部ホームページにて閲覧できます。

◆研究発表原稿の公開期間は2020年11月18日（水）～12月24日（木）です。

◆質疑応答の期間は2020年11月18日（水）～11月24日（火）です。

◆参加費は無料とします。

◆問い合わせ先 〒520-0862 大阪市平津二丁目5番1号 滋賀大学教育学部
(一社)日本家政学会関西支部 第42回研究発表会 実行委員長・與倉 弘子
Tel 077-537-7837 E-mail kasei-kansai2020@edu.shiga-u.ac.jp

プログラム

A 会場 食物

A-01 奈良県育成イチゴ「珠姫」の品種特性

○杉山京香¹、福本真由¹、矢奥泰章²、西本登志²、萬成誉世¹、高村仁知¹
(¹奈良女子大、²奈良県農研開発セ)

A-02 ミニパプリカの果実色と収穫時期が機能性成分および嗜好性成分に及ぼす影響

○山口珠央¹、鈴木歩¹、矢奥泰章²、萬成誉世¹、高村仁知¹
(¹奈良女子大、²奈良県農研開発セ)

A-03 ストライプペポ種子の保存条件が脂質劣化と嗜好性に与える影響

○橋本怜奈¹、石川晴菜¹、戸上真衣¹、矢奥泰章²
西本登志²、嶋岡龍平²、萬成誉世¹、高村仁知²
(¹奈良女子大、²奈良県農研開発セ)

A-04 大学生における5種のミニトマトの色の選択性、嗜好性と糖酸度の関連

○西川章江、吉岡那菜
(大阪教育大)

A-05 色彩の異なるサラダの印象と嗜好との関連

—兵庫県内女子大学生を対象とした検討—

○星野亜由美、竹中千明、山根早絵、岸田恵津
(兵庫教育大)

- A-06 保育園の給食のメニュー分析と幼児の嫌いな食材を使った料理の提案
 ○眞木優子¹、北村真理²、堀内理恵²
 (¹園田学園女子大学短期大学部、²武庫川女子大学)
- A-07 食育が児童の食行動に及ぼす影響 —学校給食に着目して—
 ○溝上 彩
 (京都女子大)

B 会場 被服

- B-01 オンライン形式による被服構成学実習の授業実践
 ○末弘由佳理、山本泉
 (武庫川女子大)
- B-02 大阪樟蔭女子大学所蔵の服装史教授用掛図に関する調査と分析
 ○水野夏子、森優子
 (大阪樟蔭女子大)
- B-03 絹製アームカバーの屋外曝露による紫外線遮蔽性能と消費性能
 奥田さくら、○竹本由美子
 (武庫川女子大)
- B-04 様々な染料で染色した天然皮革や天然皮革・人工皮革素材がもつ色の傾向について
 ○安本知世、古濱裕樹
 (武庫川女子大)
- B-05 藍の青色染料としての重要性についての考察 —藍がなかった場合の色彩を考える—
 ○古濱裕樹¹、坂本ゆか^{2, 3}
 (¹武庫川女子大、²神戸松蔭女子大、³横浜国大院)
- B-06 BC(バクテリアセルローズ)ペリクルとPVAの複合化
 ○日置理恵、澤渡千枝
 (武庫川女子大)
- B-07 子宮頸がん用細胞採取ブラシの研究開発
 —組紐および PLLA を用いた Y 字型異形断面糸による試作ブラシ—
 ○森野ひとみ¹、平田耕造¹、中野恵之²、山根秀樹³、野村和久⁴
 (¹神戸女子大、²兵庫県立工業技術セ、³京都工繊大、⁴西脇病院)

C 会場 住居・健康

- C-01 夏期における大学生を対象とした熱中症対策に関するアンケート調査
 ○阪本実美、久保博子、芝崎学
 (奈良女子大)

- C-02 冷房環境が心理反応に及ぼす影響について
 ー第1報 教室における女子学生の実測調査ー
 ○清水彩加、久保博子
 (奈良女子大)
- C-03 マンション居住者の防災意識からみる在宅避難生活に関する研究
 ○生田英輔、宮崎千紗
 (大阪市大)
- C-04 「SDGs 未来都市」の提案書にみる子どもの地域づくり・まちづくり
 ー子ども条例を掲げている自治体を事例にー
 ○花輪由樹
 (兵庫教育大)
- C-05 地域社会における多世代交流拠点としての道場の役割に関する研究
 ー伊丹市の修武館を事例としてー
 ○溝口理嘉子¹、碓田智子²
 (¹修武館、²大阪教育大)

D 会場 家族・子ども・教育

- D-01 保育者からみた現代の家族と家庭教育 ー自由記述の分析からー
 ○表 真美
 (京都女子大)
- D-02 コロナ禍による休校期間中の家庭学習 ー小学校の外国語科に着目してー
 ○山田たま、表 真美
 (京都女子大)
- D-03 デュアルシステムによるキャリア教育の意義について
 ー進路多様校における職場体験実習からー
 ○小川須美江 表真美
 (京都女子大)
- D-04 大学生のキャリア形成プログラムの開発と支援体制に関する実践的検証
 ー高大連携に着目した授業実践からー
 ○八木利津子¹、小川須美江²
 (¹桃山学院教育大学、²京都女子大大学院)
- D-05 学生が乳幼児親子と触れ合う体験の意義
 ー大学の資源を活用した試みを通してー
 ○平松紀代子
 (滋賀大学)

研究発表要旨

目次

A 会場 食物

B 会場 被服

C 会場 住居・健康

D 会場 家族・子ども・教育

A-01

奈良県育成イチゴ「珠姫」の品種特性

○杉山京香¹、福本真由¹、矢奥泰章²、西本登志²、萬成誉世¹、高村仁知¹
(¹奈良女子大、²奈良県農研開発セ)

【目的】イチゴは各県で品種改良が行われ、多くの品種が出回っており、奈良県の主要農作物の一つである。本研究では、奈良県が新たに育成した「珠姫」と既存の6品種について機能性成分および嗜好性成分を測定し、「珠姫」の品種特性を明らかにすることを目的とした。【方法】奈良県農業研究開発センターにおいて2019年12月～2020年2月に収穫した試料を用いて、ポリフェノール量、アントシアニン量、アスコルビン酸量、有機酸量および遊離糖量の測定を行なった。【結果】「珠姫」は遊離糖量、有機酸量ともに少ないという特徴が見られた。これは酸味を感じにくいという官能評価の傾向と一致した。

A-02

ミニパプリカの果実色と収穫時期が機能性成分および嗜好性成分に及ぼす影響

○山口珠央¹、鈴木歩¹、矢奥泰章²、萬成誉世¹、高村仁知¹
(¹奈良女子大、²奈良県農研開発セ)

【目的】近年、栽培しやすいミニパプリカが育成され、市販されるようになった。今後、生産・需要の増加が見込めるミニパプリカについて、果実色と収穫時期が機能性と嗜好性に及ぼす影響を明らかにすることを目的とした。【方法】奈良県農業研究開発センターで7～10月に収穫したミニパプリカとピーマンを試料とし、総ポリフェノール量、アスコルビン酸量、β-カロテン量および遊離糖量の測定を行うとともに、官能評価を行った。【結果】果実色ごとに特徴的な成分が異なり、機能性成分は7月に高値を示し、ピーマンと比較して豊富に含まれる成分が多かった。

A-03

「ストライプペポ」種子の保存方法が脂質劣化と嗜好性に与える影響

○橋本怜奈¹、石川晴菜¹、戸上真衣¹、矢奥泰章²、西本登志²、嶋岡龍平²、萬成誉世¹、高村仁知²

(¹奈良女子大、²奈良県農研開発セ)

【目的】「ストライプペポ」は、国産かぼちゃ種子として利用が注目されている。しかし、種子表面を覆う殻が無いために、酸素による影響を受けやすいと考えられる。本研究では、含有量の多い脂質に注目し、適切な保存条件について検討を行った。【方法】「ストライプペポ」種子をPAPE製袋及びPE製袋にて、25℃、5℃、-20℃で保存を行った。一定期間保存し、脂質劣化の指標である過酸化物質価及び酸価、カルボニル価の測定と官能評価を行った。【結果】PAPEで冷蔵もしくは冷凍保存を行えば、12ヶ月保存した後も嗜好性に関する評価が低下しないことが示唆された。

A-04

大学生における5種のミニトマトの色の選択性、嗜好性と糖酸度の関連

○西川章江、吉岡那菜
(大阪教育大)

本研究では、大学生におけるミニトマトの色（赤・橙・黄・緑・紫）の選択性、嗜好性と糖度、酸度および糖酸度比との関連について調査することを目的とする。調査したミニトマトの糖度と酸度には中程度の正の相関($r=0.473, p=.017$)が認められ、酸度と糖酸度比には強い負の相関 ($r=-0.927, p=.000$) が認められた。糖酸度比はおいしさの指標とされるが、この結果から、ミニトマトの酸度がおいしさを左右することが示唆された。黄色のミニトマトの選択性、味の嗜好度も高く、糖酸度比も高かった。しかし、紫色や緑色の糖酸度比も低かった。その選択性は低かったが、選択者の味の嗜好度は高かった。

A-05

色彩の異なるサラダの印象と嗜好との関連 —兵庫県内女子大学生を対象とした検討—

○星野亜由美、竹中千明、山根早絵、岸田恵津
(兵庫教育大)

色彩の異なるサラダの印象の差異や、嗜好性について検討することを目的とした。女子大学生 34 名を対象とし、質問紙調査を実施した。研究協力者には5つの色彩〔赤、橙、黄、緑、紫〕のサラダの写真を配付し、その印象〔鮮やかさ、健康的、栄養、豪華、みずみずしさ〕と嗜好性〔好ましさ〕、各色に対応する野菜の好き嫌いを尋ねた。色彩の異なるサラダの印象や、印象、野菜の好き嫌いとの関連を検証した。結果、サラダの印象は色彩によって異なることが示された。また、サラダの嗜好性は、サラダの印象や一部野菜の好き嫌いから総合的に評価されていることが推察された。

A-06

保育園の給食のメニュー分析と幼児の嫌いな食材を使った料理の提案

○眞木優子¹、北村真理²、堀内理恵²
(¹園田学園女子大学短期大学部、²武庫川女子大学)

保育園給食の実態を把握することを目的に自園給食を実施している西宮市内私立保育園 1 園の献立表を基に 2019 年 1 月～12 月のメニュー分析を行った。また、幼児の嫌いな椎茸を用いた料理を開発し同園の保育園職員計 22 人を対象に評点法による官能評価を実施し一元配置分散分析を行った。メニュー分析の結果、主菜のたんぱく質源は肉類の使用頻度が高かった。メニューの広がりや栄養面から魚類や豆類を増やすことが望ましいと考えられた。官能評価では、総合評価で「しいたけケーキ」の評価が最も高く残菜も 0 であった。椎茸を細かく切る、甘味や香りをつける、加熱することは椎茸の味や香りを弱めると考えられ、椎茸を食べることができる可能性が示唆された。

**食育が児童の食行動に及ぼす影響
—学校給食に着目して—**

○溝上 彩

(京都女子大)

2005年食育基本法が成立して以降、あらゆる世代を対象としてライフステージ別に食育の普及が図られてきた。とりわけ学童期は食生活の基礎を作り、食に関する正しい知識を得る重要な時期であり、学校では給食指導を始めとした教科横断的な授業への取り組みが行われている。しかし給食の残食はいまだに多く、中学生の食に関する意識は小学生より低い、という実態が指摘されている。そこで学校で行われる食育の結果として食に関する知識の定着状況や児童が持つ食育の役立ち感と家庭における食環境が、給食摂取における食行動にどのように関連しているのかについて明らかにすることとした。

B-01

オンライン形式による被服構成学実習の授業実践

○末弘由佳理、山本泉
(武庫川女子大)

作図、布の裁断、縫製等の内容を含む被服構成学実習はこれまで対面形式で授業を実施してきた。新型コロナウイルス感染症緊急時代宣言を受け、全ての授業でのオンライン化が決定し、その中で実施した被服構成学実習のオンライン授業の実践について報告する。アイテムにおいては道具等の物理的側面を鑑み、スカートとワンピースからマスクとショートパンツに変更した。授業形態は、Google Meet を用いたライブ配信型を主として、説明のための動画、静止画、スライドを事前に作成し、作図においては書画カメラを用いてライブで実演を行った。全履修者が履修放棄することなく、授業に参加し、課題を提出することができた。

B-02

大阪樟蔭女子大学所蔵の服装史教授用掛図に関する調査と分析

○水野夏子、森優子
(大阪樟蔭女子大)

日本に現存する掛図は、近現代における教育内容と視覚教材の重要性を如実に語る貴重資料である。大阪樟蔭女子大学には、裁縫掛図および服装史教授用の掛図が所蔵されており、これらを詳細に調査・分析することによって、女子高等教育機関における視覚教材の掛図を活用した服飾教育の様相を明らかにすることができると思われる。本発表では、大阪樟蔭女子大学が所蔵する服装史教授用の掛図計 80 点を取り上げることとし、実物調査を通して、掛図自体の状態や体裁、内容などの基本情報を整理するとともに、掛図としてどのような価値を持つものか分析（価値的要素の抽出）を試みた。

B-03

絹製アームカバーの屋外曝露による紫外線遮蔽性能と消費性能

奥田さくら、○竹本由美子
(武庫川女子大)

絹が紫外線を吸収するという性質に着目し、外出時や運転時に紫外線から防御するために着用するアームカバーにも、絹製のものを目にすることが多くなった。繊維の中でも絹は保温性・吸湿性・通気性に優れ、肌触りも良いため衣料品に最適であるが、紫外線を防御する繊維製品への絹の使用は、繊維の劣化に伴い紫外線遮蔽性能が低下することも考えられる。そこで、市販の各種繊維を用いたアームカバーを長期間屋外曝露した場合の紫外線遮蔽率及び色の変化を比較すると共に、洗濯や摩擦などに伴う紫外線遮蔽率の変化についても検証した。

B-04

様々な染料で染色した天然皮革や 天然皮革・人工皮革素材がもつ色の傾向について

○安本知世、古濱裕樹
(武庫川女子大)

近年、天然皮革の価値を高めようと天然皮革を天然染料で染色し天然皮革独自の風合いを好む風潮が高まってきている。また技術革新が進み、外観や手触りだけでは区別がつかないほどのハイクオリティな合成・人工皮革素材が普及し、大量生産大量消費される時代の中で、今一度“天然皮革の本来の良さとは何か”ということに立ち返った。筆者がいくつかの天然皮革鞣し革を染色した革、また加工・仕上げ方法が異なる様々な革素材において得られる色がどのような傾向にあるのかについて、得られた色データを客観的に分析・考察を行った。

B-05

藍の青色染料としての重要性についての考察 —藍がなかった場合の色彩を考える—

○古濱裕樹¹、坂本ゆか^{2,3}

(¹武庫川女子大、²神戸松蔭女子大、³横浜国大院)

「藍が地球上になれば近世までの繊維の色彩はどのようなものだったか」を客観的に明らかにするため、藍で染められる色彩の特徴を整理し、絹とセルロース繊維（綿、麻、その他）それぞれの濃淡による色の違いを明らかにした。また、藍以外で青色が得られるログウッド、プルシアンブルーなどの色彩と比較した。絹と綿、濃淡の違いによって異なる藍の多様な色を平均色の色票で表現した。ログウッドやクサギなどで染まる色の特徴を $L^*a^*b^*$ 色度図から考察し、藍のある限られた濃淡や繊維の色に近いものであることを示した。藍が存在しない場合の天然染料で染まる色も色度図で表した。

B-06

BC(バクテリアセルロース)ペリクルとPVAの複合化

○日置理恵、澤渡千枝
(武庫川女子大)

「ナタデココ」として知られるBC(バクテリアセルロース)ペリクルとPVAを複合化し、バイオマス由来かつ生分解性に優れた材料の作製を検討した。PVAの Me_2SO :水=70:30(vol%)溶媒中でのゲル化に要する時間と、経時による弾性の変化を測定し、ゲル化に適した温度や濃度、ゲル化時間を検討した。BCペリクルを、PVA5%・ Me_2SO :水=70:30の条件で複合化することで、元のペリクルより高強度かつ透明化した複合化物を得ることが出来た。また、凍結乾燥したものも弾性と透明度が保持されていた。

子宮頸がん用細胞採取ブラシの研究開発

－ 組紐および PLLA を用いた Y 字型異形断面糸による試作ブラシ －

○森野ひとみ¹、平田耕造¹、中野恵之²、山根秀樹³、野村和久⁴

(¹神戸女子大、²兵庫県立工業技術セ、³京都工繊大、⁴西脇病院)

子宮頸がんは、20歳代後半から増加し40歳代でピークを迎える。子宮頸部細胞採取器具には、主に綿棒・ブラシ等がある。これらを用いる検査の細胞採取精度は約50-70%と高くなく、再検査も少ない等の短所もある。本研究では、ブラシの欠点を改良した丸断面およびY字型異形断面繊維糸を用いた組紐子宮頸部細胞採取ブラシを作製し、若者採取法で吸着量実験を行い比較検討した。その結果、現市販ブラシより丸断面組紐試作ブラシよりY字型異形断面組紐試作ブラシの方が、吸着量が高かった。中でもS-凹凸ねじり組紐が特に優れている。子宮頸がん用細胞採取ブラシとして組紐技法を用いたY字型異形断面試作ブラシの有用性が確認できた。

C-01

夏期における大学生を対象とした熱中症対策に関するアンケート調査

○阪本実美、久保博子、芝崎学

(奈良女子大)

熱中症発生件数は年々増加傾向にある。学生で学校での運動中に多く、対策が求められている。そこで、熱中症に対する意識や対策についての実態を明らかにするため昨年夏期の熱中症対策について運動習慣の異なる学生を対象にアンケート調査を行った。結果から運動習慣の違いにより熱中症対策に有意差が見られ、運動習慣の多い者ほど体温上昇や水分喪失に応じた対策が多く運動習慣の少ない者ほど体温上昇の原因を避ける傾向があることが明らかとなった。発症及び重篤化予防のため対策を講じる必要があると言える。

C-02

冷房環境が心理反応に及ぼす影響について -第1報 教室における女子学生の実測調査-

○清水彩加、久保博子

(奈良女子大)

冷房による温度分布や気流が在室者の心理反応に及ぼす影響について検討した。女子大生156名に温冷感・快適感等の温熱環境評価をさせ、その際の教室内の温湿度等を測定した。教室内には上下温度差や温度分布が生じており、吹き出し口に近い在室者の下腿部が有意に寒い側の申告であり、気流も感じる傾向にあった。また、寒いと申告した人ほど気流を感じており、吹き出し口の温度は約13℃であり、後日計測した平均気流速度は約0.14m/s程度であった。やや涼しいと感じる時が最も快適であり、やや涼しいと申告した在室者の平均周囲気温は $25.5\pm 0.7^{\circ}\text{C}$ であった。

C-03

マンション居住者の防災意識からみる在宅避難生活に関する研究

○生田英輔、宮崎千紗

(大阪市大)

都心回帰現象による都心部の人口急増や、新型コロナウイルス感染症により、従来の災害時避難所では容量不足の可能性が高まり、避難所ではなく自宅で避難を継続する在宅避難を促すことが一部地域では始まっている。本研究では、大阪市のマンション居住者を対象にアンケート調査を実施し、マンション居住者の防災意識から、在宅避難生活に対する備えや課題を明らかにした。災害時の備蓄状況は不十分であり、インフラ停止想定と備蓄量には関係が見られてなかった。また、居住階の高低に関わらず災害発生後もインフラが機能していれば自宅で生活したいと考える人が多く、エレベーターが停止した場合においても同様の傾向が見られた。

C-04

「SDGs 未来都市」の提案書にみる子どもの地域づくり・まちづくり —子ども条例を掲げている自治体を事例に—

○花輪由樹

(兵庫教育大学)

本研究は、「子ども条例」を掲げてきた自治体が「SDGs 未来都市」の提案書に、子どもの地域づくり・まちづくりへの参加をどの程度示しているのかを探った。その結果、「SDGs 未来都市」(93 地域)のうち、「子ども条例」を掲げている自治体(39 地域:H26 年時点)に該当したのは 10 地域であることが明らかになった。これらの自治体の R1 年、R2 年の提案書を分析すると、子どもを主体とした地域参加や(名古屋市)、まちの情報発信の主体として子どもを捉える(宗像市)内容が提示されていた。他の地域はそれほど強調されていなかったことから、「子ども条例」を掲げる自治体が SDGs の文脈で、子どもの地域づくり・まちづくりの推進を行うには地域差があることがうかがえた。

C-05

地域社会における多世代交流拠点としての道場の役割に関する研究 —伊丹市の修武館を事例として—

○溝口理嘉子¹、碓田智子²

(¹修武館、²大阪教育大)

兵庫県伊丹市では、地域住民の「世代間交流」が深まるようにスポーツ団体や地域と協力して、生涯スポーツの環境づくりに力を入れている。本研究では、市民に武道を指導している修武館を事例として、子どもから高齢者まで、年齢幅の大きい者たちが一緒に稽古をするという剣道の特性が、コミュニティの醸成に役立っているのではないかと仮説の下で多世代交流の拠点とした道場の役割の検証をアンケート調査等から行った。その結果、おとなと接する経験が多い子どもは、コミュニケーション力が高い傾向が窺えた。また、子どもの頃からおとなとの交流の機会を習慣的に持つことで、おとなとの交流が自然と行われるようになることが示唆された。

D-01

保育者からみた現代の家族と家庭教育 — 自由記述の分析から —

○表 真美
(京都女子大)

乳幼児やその保護者に日々接している保育者は、現代の家庭教育をどのようにとらえているのかを明らかにすることを目的に、2014年にK市内の17幼稚園、24保育園を対象に郵送法による質問紙調査を行い、幼稚園教諭184名、保育士324名、計508名から回答を得た。本報告では、自由記述のべ456件を分析対象とした。その結果、保育者が現代の子どもについてとらえる特徴語は「自己主張」「生活習慣」であった。自分の主張はできるが相手の意見を聞けず、生活習慣が身につけていない子ども像、また、「過保護」な幼稚園、「仕事優先」の保育園の保護者、「意見」を聞いて「ほしい」保護者像が浮き彫りとなった。

D-02

コロナ禍による休校期間中の家庭学習—小学校の外国語科に着目して—

○山田たま、表 真美
(京都女子大)

休校期間中の外国語科の家庭学習について明らかにするために、長野県教育委員会が作成した動画コンテンツの内容、および第5学年児童の家庭学習について調査した。オンライン動画は、利点がある一方で、児童の反応を伺うことができず意思疎通が困難である。今回評価を行った動画では、児童が考える時間が充分でなかった。インタビュー結果から、休校期間中の家庭学習において外国語が占める時間が少なく、学習方法のアドバイスも見られず動画等を用いることも無かった。今後は、学校に通いながら動画を用いて復習をする、など日々の学習に組み込んでいくスタイルにも期待したい。

D-03

デュアルシステムによるキャリア教育の意義について — 進路多様校における職場体験実習から —

○小川須美江 表真美
(京都女子大)

デュアルシステムによるキャリア教育の意義を明らかにすることを目的とし、「進路多様校」である大阪府立A高等学校を対象に訪問調査を行った。その結果、当校のデュアルシステムによる職場体験実習は週1回の通年授業であり、1事業所に1人の実習生が配置され、正規授業の単位として認定されていた。実習後の生徒による発表会からは、現場における様々な発見や生徒自身の成長を読み取ることができ、生徒による感想文集からは、自己の存在への認識(自尊感情)、対話による信頼関係の構築、仕事に対する意識の変化が、実習を通して培われていったことがわかった。

D-04

大学生のキャリア形成プログラムの開発と支援体制に関する実践的検証 —高大連携に着目した授業実践から—

○八木利津子¹、小川須美江²

(¹桃山学院教育大学、²京都女子大大学院)

大学生のキャリア形成に関わる高等教育プログラムの開発に向けて、特別支援学校に在籍する高校生との交流活動を通じて効果的なキャリア教育支援の在り方や支援体制づくりの検証を目的とする。教員志望の大学生1年生～4年生20名を対象に授業実践前後に自記式質問紙調査を行い、キャリア形成を意図した授業「フィールドワーク」についてキャリアアンカー理論から『動機・欲求』『才能・能力』『価値・態度』の構成要素に基づきカテゴリー化し、テキストマイニング法を用いた分析から授業実践前後の大学生の思考の変化の有無などを考察した結果、“自己肯定感” “充実感” “将来志向性” について有用性が明らかに示唆された。

D-05

学生が乳幼児親子と触れ合う体験の意義 —大学の資源を活用した試みを通して—

○平松紀代子

(滋賀大学)

社会が近代化し少子化傾向が顕著になるなかで、乳幼児と触れ合う機会がないまま親となる人が増加している昨今では、親となる前に乳幼児親子との触れ合いの機会を意識的に設ける必要性和意義が高まっている。本研究では、大学において学生が乳幼児親子と触れ合う場を創設する実践的試みと、その意義をテキストマイニングソフト KHCoder を用いて分析した。学内での限定的な体験であるが、学生は就労、結婚等のライフイベントを含めた人生に前向きに向き合おうとする契機となっていた。保護者の姿と未来の自分と重ねて捉えることにより、具体的なイメージをポジティブに捉えて、主体的にライフデザインしようとする素地の形成に貢献していることがうかがえた。

2020（令和2）年度
一般社団法人 日本家政学会関西支部
第42回（通算第98回）研究発表会
実行委員会

與倉弘子（滋賀大学）（委員長）
久保加織（滋賀大学）
田中宏子（滋賀大学）
平松紀代子（滋賀大学）

2020（令和2）年度 一般社団法人 日本家政学会関西支部
第42回（通算第98回）研究発表会

研究発表要旨集

編集・発行 一般社団法人 日本家政学会関西支部
第42回（通算第98回）研究発表会実行委員会
〒520-0862
大津市平津二丁目5番1号
滋賀大学教育学部内

発行日 2020（令和2）年10月30日